

国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』について

館 隆 志

はじめに

本論は、国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』（以下、国文研本）の翻刻と対校を行なうものである。『心根決疑章』は、鎌倉期から南北朝期にかけての写本が、称名寺所蔵（金沢文庫管理）で現存しており（以下、金沢文庫本）、その著者が達磨宗二祖の仏地房覺晏であることが判明したため、中世初期の禅宗の受容と展開の解明のため、極めて重要な書物であることがわかってきた。

国文研本は、高木浩明「国文学研究資料館蔵古活字版悉皆調査目録稿・附、国立国語研究所・研医会図書館蔵本」（『調査研究報告』三九、人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一九年、二三〇頁）に詳しい調査報告が載り、

77 枕双紙・空観・教誠新学比丘行護律儀・心根決疑章・起信論一心二門大意・大乘百法明門論

〔請求番号〕ヤ4-274

〔体裁〕大本一冊。

〔表紙〕後補茶色表紙。二八・二×一九・一糎。五針袋綴。

〔題簽〕無。

〔内題〕「横川沙門源信記（七格空）枕双紙」、「（二格低）空観（九格空）楞嚴院慧心撰」、「教誠新学比丘行護律儀」（八格低）終南山沙門（三格空）道宣述」、「心根決疑章（十一格空）竟宴記」、「起信論一心二門大意（五格空）揚州智愷作」、「大乘百法明門論（二格空）本事分中略録名数」（二格低）天親菩薩造唐三藏法師玄奘奉詔訳。〔尾題〕「（三格低）枕双紙」、「教誠新学比丘行護律儀」、「心根決疑章」、「起信論一心二門大意」、「大乘百法明門論」。

〔本文〕 每半葉一〇行×二〇字。

〔匡郭〕 無辺、無界。字高、二・二・五糎。

〔版心〕 白口双花口魚尾、中縫、「枕双紙（教誠儀・決疑章・起信論・百法明）丁附」。

〔丁数〕 五〇丁半（目録・半丁、表丁欠。目録補写（慧心枕双帛付空観／教誠儀／心根決疑章／起信一心二門大意）／大乘百法明門論）／枕双紙（横川沙門源信記・六丁、空観・四丁）・一〇丁／教誠新学比丘行護律儀・二〇丁／心根決疑章・一三丁／起信論一心二門大意・五丁／大乘百法明門論・二丁）。

〔刊記〕 無。

〔印記〕 「播州斑鳩／仏餉院蔵」（朱方印）。

〔備考〕 卷首六丁、「横川沙門源信記」にのみ朱墨による訓点が施されている。「横川沙門源信記（七格空）枕双紙」の巻末に識語、「于時長保三季三月下旬／横河楞嚴院源信竊記」、「時寛文辛亥冬十有一月以点付本点之了澄心叟寂通書（「寂通」朱印）。川瀬、七九三頁に「仏書の無刊記本類で旧著の後一見したもの」として著録する「枕双紙・教誠儀・心根決疑章・起信一心二門大意・大乘百法明門論（右五部合）刻、十行二十字、一冊。一誠堂にて一見」が本書。

と記されている。

これによれば、本書は一誠堂書店の旧蔵本であり、これを現在、国文学研究資料館が所蔵していることになる。また、本書は他に残っておらず、孤本ということになるだろう。内容の異なる諸本を集めて一冊として刊行したようである。合刻刊本は、源信（九四二〜一〇一七）の『枕双紙』と『空観』道宣（五九六〜六六七）の『教誠新学比丘行護律儀』覺宴（生没年不詳）の『心根決疑章』、楊州智愷（生没年不詳）の『起信論一心二門大意』、玄奘（六〇二〜六六四）の『大乘百法明門編』が合刻され一冊として構成されている。また、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースの書誌情報によれば、寛永頃の古活字版で、補修されており、その画像は新日本古典籍総合データベースで公開されている。本書の来歴を知る上での重要な情報は以下の三点である。冒頭の目録半丁欠が書写で補われその下に「播州斑鳩仏餉院蔵」の蔵書印があること、最初の収録典籍である『枕双紙』の末に「時寛文辛亥冬十有一月以点付本点之了。澄心叟寂通書（「寂通」朱印）」とあること、合刻刊本の巻末に「仏餉蘭若僧 寂阿」と墨書されていることである。

仏餉蘭若僧叔阿(潜嶽祖龍) 二〇五八

播州(兵庫県)斑鳩仏餉ぶがうしやういんとある。「斑鳩」は、兵庫県揖保郡太子町鳩(播磨国揖保郡)にある聖徳太子を由縁とする斑鳩寺のことである。天文十年(一五四一)に戦禍を受けて灰燼に帰した。その後、赤松氏の外護のもと、復興されていくが、その際に、法隆寺末から天台宗に改めたとされる。そして、「仏餉院」は斑鳩寺の塔頭寺院であるが廃絶し、現存していない。ただし、仏餉院の寂阿というのは、後に禅宗の盤珪永琢(一六二二〜一六九三)の法を嗣いだ潜嶽祖龍(一六三一〜一六八六)の、天台僧時代の旧名であり、仏餉院で住持を勤めた記録が残る。

潜嶽祖龍については、『富士山志』^④に数種の伝記が収録されているが、このうち巻八に「(如法寺)二世潜嶽龍和尚行状」には、

師諱祖童。字潜岳。播州揖東郡斑鳩郷人也。俗姓湯淺氏。寛永辛未歲臘月二十一日辰之上刻誕而、稍長穎異。智種夙彰、歲覃舞勺而、雖在志薙染、父母不割愛。好讀書則親大呵嘖。依之自為童。昼忍父母之所見入藏酒米所、忘却飲食而素読焉。夜為臥而籠寢室、密桃灯而看読焉。至十七歲、頗有出塵之志。因辞親。親不許容。竟入一室、閉戸終日絶食。自以為不如死去。親思念其深心遂聽出家。即就於邑仏餉院玄守法印薙髮号寂阿。十九歲初遊学於叡峰、居之十有年、及壯歲帰郷住仏餉、為院主。時司太子正殿之造宮、及新造仏餉之客殿庫院。左精台教。四教儀集解印本之行于世者久矣。然而、文字之脱落、科文之化謬、不能無憾焉。於是、師寛文戊申歲、於京師考異本焉、問諸老焉、正其科焉、完其字焉、又改其訓点焉。重鏤版使諸者披雲霧矣。可謂功于後学。今行于世也。師少時心学徒之請。癸卯歲自夏四月至秋末、講四教集解于仏餉院。専有義学之声矣。郷人玄才(称清兵衛)、語師曰、方今天下具大眼目底宗師、唯有盤珪禪師一人而已。現住綱浦竜門寺、禪風大振、学者駿奔。何不速参取去矣。師輒謁禪師于竜門、問答往復、始知教外有旨帰敬。豈非是大因縁乎哉。師在仏餉院、則詣於竜門及帰院。則禪師謂師曰、汝聞隣寺鐘声乎。師不会帰院。而在者事於心頭、行住坐臥、打成一片十日余。有時、院傍以物扣箒。則忽然聞了隣寺鐘声。即日步行竜門而、欲証抛禪師。時禪師入関。因以介紹而通來儀而、相見禪師。則禪師帳中平臥。師到寢室揚帳。則忽禪師謂師曰、汝聞得鐘声来。師心諾語話焉。師又為仏餉院主時、随台宗学徒之請、欲講自証訂四教集解於撰之坂府。而相見禪師。則禪師立一指此経如何問。師言下知非自恨。信不及不領深旨。自是止適於講。面壁打坐者尚。而頓會一指頭禪。直下猛

省曰、我居講肆、研究大小權実、雖講得百本經論、不如一個無事底阿師。休歇去便出仏餉院。登竜門、取弟子礼、更衣革名、撥草瞻風、処衆涉日。工夫益深密、活潑潑地。見免忘蹄。侍左右而助揚法化。其機縁語句、載在于行録矣。（後略）

とあり、これによれば、寂阿は十九歳で比叡山に登り、十余年修行して、壮年に郷里に帰り、仏餉院に住持したという。太子正殿、客殿や庫院を造営し、また、『天台四教儀集解』を用いて指導していたという。

このうち、「四教儀集解印本之行于世者久矣。然而、文字之脱落、科文之化謬、不能無憾焉。於是、師寛文戊申歳、於京師考異本焉、問諸老焉、正其科焉、完其字焉、又改其訓点焉。重鏤版使諸者披雲霧矣」とある部分については、寛文九年（一六六九）に刊行された、『天台四教儀科解』三巻の末尾に、

寛文戊申冬播陽斑鳩教寺沙門寂阿訂正。
とあり、さらに奥書として、

四教儀集解者、觀師撰之、神智記之、卷盈乎、三帙義包於一藏。洋洋焉、浩浩焉。不迷諸部之言、不誣而已。慶長年中、三井沙門亮憲僧正、採記文而按本書之下、以便于後学也。爾来、印本之行于世者久矣。然而、文字之脱落、科文之化謬、不能無憾焉。属者播陽斑鳩之僧寂阿、於京師考異本焉、問諸老焉、正其科焉、完其字焉、又改其訓点焉。重鏤版而、使諸者披雲霧矣。梓成就余請跋之。余嘉其善而、於是乎書。寛文己酉孟夏之朔、独師師蛮、把筆於洛東東西軒。（続蔵一〇二・七〇d）

とあることを指していると思われる。寛文八年（一六六八）に寂阿が入洛して諸師を訪ねて校正したものが刊行されたわけであるが、当の寂阿は刊行された年には盤珪永琢に参じて、禪に転じていたことになろう。

この他、叡山文庫戒光院蔵『三大部述聞見聞目錄』に、

慶安中、於山門西塔院、三大部見聞述聞全部、捐浄贖令人傭書、交講肆之暇、手自書之。古本紛失、猶有闕本脱落。晚還郷里、見述之間、混乱正之、重本除之、調卷為一百三十一卷、出目錄一貼留贈後学也。寛文元年九月日、播陽斑鳩寺仏餉院寂阿。

という奥書があり、寂阿は寛文元年（一六六一）には仏餉院に住持していたらしい。

また、寛文十一年（一六七二）に『枕双紙』の部分のみに書き入れを行なった斑鳩寺仏餉院の寂通であるが、斑鳩寺

所蔵『峯相記』の奥書（魚澄惣五郎『斑鳩寺と峰相記』、全国書房、一九四三年）によれば、斑鳩寺に現存する重要文
化財の『峯相記』は、斑鳩寺仏餉院の寂通によつて寛文十一年に題が附されたものであることがわかる。以上のことか
ら、寂通も斑鳩寺仏餉院の僧であつたことになるが、「寂」の系字からすれば、寂阿の弟子だつたのではないだろうか。
寂阿は縁を得て盤珪永琢に参禅して帰依し、仏餉院を退いているが、この時に蔵書とともに住持を寂通に譲つたと思わ
れる。この時の蔵書に『心根決疑章』を含む合刻本が含まれており、これが現在、国文学研究資料館に所蔵されてい
ると考えられる。すなわち、題名不明の国文学研究資料館所蔵の合刻刊本は、もともと潜嶽祖龍の天台僧時代の手沢本と
いうことになるだろう。

寂阿はその後、縁を得て盤珪永琢に参禅して帰依していることから、潜嶽祖龍が仏餉院を退いて、天台宗から臨済宗
に改め、その蔵書を寂通が引き継いだものと考えたい。

潜嶽祖龍は、その晩年に天台宗の学僧から禅宗に転派したわけであるが、祖龍蔵書の『心根決疑章』が、鎌倉時代の
初期に天台から禅に転じた仏地房覚晏の著述だとはよもや思わなかつたであろう。しかしながら、この数奇な縁によつ
て、同書が現在まで伝わり、国文学研究資料館に所蔵されていることは、本書の履歴を考える上で興味深い。

金沢文庫本と国文研本の違いについて

金沢文庫本と国文研本の違いとして、冒頭の著者名の表記が、国文研本で「覚宴記」となっているのに対し、金沢文
庫本では「扶桑第二相承沙門覚宴述」とより詳しい。また、金沢文庫本には「心根決疑章（于時承久三年十二月一日赴
大麓請沙門覚宴記之）」という奥書（識語）が途中に挿入されていて、その後も文章が続くため、前後二段に分かれて
いるようにも見える。一方、国文研本には途中の奥書（識語）がなく、前後二段に分かれていない。すなわち、金沢文
庫本しか残っていない場合、後半部分は別人の手にかかる可能性が浮上するが、国文研本の存在によって、後半部分も
著者の手にかかるものと考えることができる。

一方、金沢文庫本と国文研本は、前半部分には大きな相違は見られないが、後半部分になるとかなりの相違を確認す
ることができる。すなわち、国文研本は、金沢文庫本とは別系統のものに基づく可能性が高い。転写に際しての起こり
える誤差とは言いがたいため、著者自身、あるいは弟子の手によつて、国文研本の形に整えられたと考えたい。その他、

国文研本が基にしたもの、あるいはそのさらに基となるものが後半部分に虫損が多くあったために、細かな相違が多くなった可能性を想定しても良さそうである。

国文研本の（10ウ）（11オ）であるが、金沢文庫本には、それぞれの関係を示す線が記されているが、国文研本にはこれがない。ただし、これについては、国文研本が古活字版であることも原因であろうか。この点、細かな字体の相違は、写本と古活字版であることに基づく相違としても考えておく必要があるであろう。ただし、金沢文庫本においては、最も中心として記されている「根本心王仏」の部分が、国文研本に存在していないことは大きな問題である。これが意図的なものであったかについては、より慎重な考察が必要となろう。

いずれにしても、写本と古活字版という相違がもともと存在するという前提を踏まえたとしても、金沢文庫本と国文研本の相違はかなりあると言つて良いだろう。したがつて、金沢文庫本と国文研本は、別系統のものとして理解すべきである。国文研本は、『心根決疑章』の成立を考える上でも、また、その内容を考える上においても、極めて重要な伝本の一つということができよう。

〔補記〕本論は、JSPS 科研費 JP20K00060 の助成を受けたものである。

〔註〕

- (1) 館隆志「称名寺所蔵（金沢文庫管理）『心根決疑章』翻刻―達磨宗新出史料の紹介」『東アジア仏教研究』一七、二〇一九年。館隆志「新出史料『心根決疑章』の発見とその意義―達磨宗二祖仏地房覚晏の著述をめぐつて―」『印度学仏教学研究』六八―二、二〇二〇年。館隆志「達磨宗新出史料『心根決疑章』と仏地房覚晏」『駒澤大学仏教学部論集』五一、二〇二〇年。館隆志・吉村誠・師茂樹・山口弘江・柳幹康「達磨宗・仏地房覚晏『心根決疑章』訓註（上）」『駒澤大学仏教学部論集』五二、二〇二一年。

(2) 斑鳩寺については、魚澄惣五郎『斑鳩寺と峰相記』（全国書房、一九四三年）を参照。

(3) 如法寺所蔵（大洲市立博物館保管）『富士山志』二十巻は、富士山如法寺末の遍照庵（廃寺）の三世住持であった元庵祖徴が、寛政十年（一七九八）に、如法寺を中心として、盤珪永琢やその弟子などの関係史料をまとめて二十巻として編纂したもの

である。本史料は、花園大学国際禅学研究所の電子達磨で公開されている。

(4) 『富士山志』には、潜嶽祖龍の伝記がいくつか収録されているが、このうち、『富士山志』巻八「(如法寺)二世潜嶽龍和尚行状」は、内容から『近世禅林僧宝伝』巻上「伊予州如法寺潜嶽禅师伝」(『訓読 近世禅林僧宝伝』禅文化研究所、二〇〇二年)のもとになった伝記の一つと考えられる。伝記の中でも比較的知られたものと判断し、本論では『富士山志』巻八「(如法寺)二世潜嶽龍和尚行状」を紹介した。『富士山志』は、花園大学国際禅学研究所電子達磨掲載のものを参照した。

(5) 澁谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』上巻(増補版、法蔵館、一九七八年)には、「三大部序註(付弘決引書籍目録)」。

②一卷③大④片⑦「題下」儒書之分計注之(奥)本云、承応元年(一六五二)四月三日於三井寺止観義例講談之御書写之舜海⑧承応二年寂阿写⑨斑鳩寺」とある。これによれば、斑鳩寺所属『三大部序註(付弘決引書籍目録)』が、承応二年に寂阿によって書写されたものであるが、おそらくはこのころは寂阿はまだ比叡山で修行していたものと思われる。

(6) 渡辺麻里子「廬山寺談『三大部見聞述聞』の享受に関する一考察―付・〔翻刻〕叡山文庫戒光院蔵『三大部述聞見聞目録』」(『人文社会科学論叢』一、二〇一六年)。同論文では、「筆者の寂阿は、詳しいことはよくわからない」と記す。

(7) 令和三年(二〇二二)十月二十八日に、貞応元年(一一二二)に「覚宴」が重刊したものに基づく三千院円融蔵所蔵『一字訣』を調査した。調査の結果、『一字訣』は仏地房覚宴の著述であり、達磨宗史料として同定することができた。この調査結果は後日発表予定であるが、奥書からは、この時点で達磨宗の覚宴は『一字訣』を二度も刊行していることになる。達磨宗は覚宴の師である能忍の代にも『伝心法要』『宛陵録』『鴻山警策』などを出版していた。このような当時の達磨宗による典籍の出版の状況を踏まえ、『心根決疑章』もかつて刊行された可能性が浮上することとなった。そのため、国文研本が刊本に基づいているという可能性も存在している。この点については、具体的な史料や記述が残っておらず、より慎重な考察が必要となるが、国分研本の成立事情を考察する上で少なからず影響するため、その可能性を提示するものである。

(キーワード) 達磨宗、仏地房覚宴、心根決疑章、仏餉院、潜嶽祖龍

国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』翻刻と対校

【凡例】

- 一、翻刻するにあたり、底本は国文学研究資料館所蔵『心根決疑章』であり、新日本古典籍総合データベースで公開されている画像を用いる。
- 一、対校には称名寺所蔵（金沢文庫管理）『心根決疑章』を用いる。なお、金沢文庫本については、金沢文庫に所蔵される影印本を用いて翻刻した拙論「称名寺所蔵（金沢文庫管理）『心根決疑章』翻刻―達磨宗新出史料の紹介―」（『東アジア仏教研究』一七、二〇一九年）に基づく。また、金沢文庫本『心根決疑章』には、返り点、訓点、送り仮名があるが、これらは対校には用いなかった。
- 一、対校に際しては、文字の右下に「*」を設け、原文の下に当該文字の校異を記した。また、校異の多い場合は次の行にも記す場合がある。
- 一、略体字、異体字を常用漢字に改める場合もある。
- 一、虫損や判読できない文字は□で表記する。ただし、金沢文庫本『心根決疑章』によって補える場合は、□の右側に（ ）で補った。
- 一、割註については（ ）で記した。また、三文字以上の割註で改行している場合については、割註内の改行は「と」表記した。
- 一、10ウと11オについては、金沢文庫本では線によって関係が理解できるような表になっており、大きな相違が確認される。文字のみの対校では意味をなさないと判断し、金沢文庫本の表をそのまま掲載した。

【翻刻と対校】

心根決疑章

覺宴記*

*覺宴記—扶桑第二相承沙門覺宴述

夫大小頭密之教西竺東夏之說判於識与根廢立

不一唯使*禪家解經円楞二文俱失幽旨濫於法相

*使—遂使

帶權之說方今愍彼迷津粗示方隅而已

大勘殊途有三宗異一*薩婆多宗說眼耳鼻舌身色

*一ナシ

形異者為*扶根扶於清淨根四大故清淨根者義如

*為—名為

珠寶光之明淨一類清淨四大所成非肉眼境名清

淨根〔清淨根義〕諸教皆同第六意根非四大種取六識之中前

念六識隨一為後意識之根如火前燄*引後燄*故凡

*燄—焰

六根者增上出生於六識故名之為根又六識者見

(1才)

聞色声属眼耳能*不名為識經部破之立為識見等

*能ナシ

首楞嚴經阿難白仏*言見是其眼心知非眼〔已上〕是則

*仏ナシ

阿難迷*本小執也如來斥之言眼*見者則諸已死尚

*迷—述 *眼—若眼

有眼存心皆見物若見物者云何名死〔已上〕然小乘宗

見屬於眼請諍*四大照色之能*既見色已胸中謂言

*諍—淨 *能—照能

是青是黃爾時名為眼識了別聞覺例知小乘有部

所立如斯二唯識宗說前五根中扶根清淨色根二

義全同有宗第六意根其義永殊謂以第七現在末

那為其意識俱有根也故瑜伽論以前念意識雖為

其意識生因不名為根以此而言小乘*以生因為其

(1ウ)

*乘—宗

根者非尽理也無有俱有依義故也立根廢立其理如斯又六識者見為眼識聞為耳識嗅為鼻識嘗為舌識覺觸為身識於意識中与五*識同一刹那同時意中取現量境不帶名言為*五俱意識亦名明了意識也第二刹那隨於比量謂言此書*此黃等時猶為明了意識境名似帶質也又以不帶本質過未等境為独影境似能緣識名独頭意識也亦名暗意識也此教深探立第八識以為本識七六已還名為轉識然七八二識互為其根云云*又意識所緣有二種法一者通法謂前五俱意識所緣前五境也二者別法

(2才)

謂雖五識但目*分別善惡無記之法塵也法相所立略知如斯

*目—自

三楞嚴会上顯於真実法相法性永異前二夫一切諸宗所立法相未顯著故筌第有滯*魚難得殊不能知窮立法相即是法性真心之体遂令法相之外

*滯—帶

更覓於法性痛哉痛哉*心知楞嚴根有二種一者色根二者心根於色根中前五全同俱舍唯識首經四

*痛哉—々々

云知精映法*攬法成根根元目為清淨四大名為意識如幽室見浮根〈浮根者〉扶根也四塵流逸奔心*〔已上〕資中云

*法—法

前五種根妄覺為性意根同此四大所造□*不許色

*心—法

(2ウ)

*所造□—何妨若

為意根者何乃畏劳心破將菓補養還得增強故所

依根定兼其色相如蓮華*現量所得如世養臣養*人

*蓮華—是蓮花 *養—食

心肝豈無形質不逢此典誰識因由諸經不言非無

此意相承學者闕此不知又孤山云此取肉团心根

為慮知之所託也正法念經云如蓮華*開合者是也

今便引処処*之又*弥頭釈成円覚經云六根四大中

外合成宗密疏云四大為中六根為外内外和合仮

成此身(已上)依此經文非云六根俱是四大耶但宗密

所釈雖似順經見於後文所釈之意於此文謂言総*

*総—惣

意別歟故下疏云然八識中不言第七者義當見聞 (3才)

等塵也*文*云前五各自種生自現行四大所造淨色

為体意根即第七識由此挙*外起意識故(已上)私云悲

哉宗密迷於円覚首楞両経廢立六根之相拋於唯

識以第七識為意根円*覚文*云心清淨故見塵清淨

*円—焉円 *文—又

(已上)是心根也聞等亦爾全同楞嚴見根聞根何以末

那為見聞等又次文云見清淨故眼根清淨(已上)是色

根也耳乃至意皆是色根亦同首楞所説色根次文

云根清淨故眼識清淨(乃至)意識清淨(已上)全同首楞識

動了別嗚呼悲哉宗密未知心体見聞覺知立為根

義文*慈恩唯識疏*中正法念經所説肉心為根之文 (3ウ)

*文—又 *疏—疏

違於自宗末那為根之義故自云正法念經違此応

会(云云)私云基師於*経欲設何会又私云資中以

*於—(慈恩也)於

相如蓮華* 虫食人心為現量得今加兩尺* 如害人持

若判余処未必即死若穿心前乃速滅耳（其一）若人* 憂

喜胸中独知以* 頂謂上以足謂下以胸謂中自然任

運現量如是又世人云胸開胸焦（其二）此則鳩尾骨下

巨闕穴上彼兩際底方寸肉团是也又医家等說五

藏之中心藏其色赤矣神住其中云云* 觀仏三昧經

云如来心相如紅蓮華* 妙紫金光以為間錯如琉璃

筒懸在仏胸不合不開团円如□^(心)* 万億化仏遊* 心間（4才）

云云* 又真言宗中龍樹菩提心論云凡人* 心如合蓮

華* 蓮華* 高野大師秘藏記云問拋秘教凡夫心□* 合

蓮華* 聖人心似開蓮華* 若以眼等識配華* 者眼等

識為在心華* 所在眼等根耶 答在心識所問若

眼識等在* 心識所眼根等曾可無用雖眼根敗尚明

了可見何故眼毀曾不見耶答譬如室中灯從壁穴

光* 明漏出穴塞則光明不流出眼根等穴穴塞時何

得光明流出耶私云首經意盲人* 見暗不依眼根但

是無明見何虧損云云* 依此応言見不入常遍法

界云云* 有人云秘藏記者非大師記云云* □^(心)* 瑜伽論（4ウ）

第一云爾時父母貪愛俱極最後決定各出一滴濃

厚精血二滴和合住母胎中合為一段猶如熟乳凝

結之時當於此処一切種子異熟所撰執受所依阿

* 華 | 花 * 尺 | 积 * 持 | 時

* 人 | ナシ

* 以 | 又以

* 云云 | 〈云々〉

* 華 | 花

□^(心) | 心 * 心 | 仏心

* 云云 | 〈云々〉 * 人 | 夫

* 華 | 花 蓮華 | 〈云々〉 * □^(如) | 如

* 華 | 花

* 華 | 花

* 在 | ナシ

* 光 | ナシ
* 私云首經意盲人 | 〈私云首經〉意盲人

* 云云 | 〈云々〉

* 云云 | 〈云々〉 * □^(心) | 又

賴耶識和合依託又云此羯邏藍（此云）疑滑* 色与心心所

安老* 共同故依託由心、心所依託力故色不爛壞色

損益故彼亦損益又羯邏藍識最初託処即名肉心

如是識於此処最初託還即從此処最後捨又云又

將終持* 作惡業者識於所依從上分捨即從上分冷

觸隨起乃* 至心処造善業者識於所依從下分捨即

從下分冷觸隨起如是漸捨乃至心処当知後識唯

（5才）

*滑—得
*老—危

*持—時
*乃—如是漸捨乃

*燄—焰

心処捨從此冷觸遍滿所依又云譬如灯燄* 生時内

執膏炷外發光明如是阿賴耶識縁内執受縁外器

相生起道理应知亦爾（私云此文粗仮* 秘藏記意而）猶不及首經之中瓶空之喻*

又宗鏡録第四云古釈有四一、絃利陀耶此云肉団

心身中藏* 心也如黃庭* 經所明二、緣慮心此是八識

俱能緣慮自分境故三、質多耶此云集起心唯第八

識積集種子生起現行四、乾栗陀耶此云堅貫* 心亦

云真実心此是真心也然第八無別自体但是真心

以不覺故与諸妄想有和合不和合義和合義者能

含染淨目為藏識不和合義体常不變目為真如故

（5ウ）

*藏—五藏
*庭—廷

*貫—実

知四種心本同一体（已上）如是文証非但一、忽然宗鏡

録五十二云小乗我* 宗取肉団与第六識為依何要

別執有第七識耶論主（護法）破云不可說第六依於色

第六有三分別随念計度自性分別故若計第六依

*我—云我

色而住者即同前五識応無随念計度二種分別 (已上)

私云今文所引小乘一説自当深理而護法既還違

其理難言同前五識応無計度随念二種分別者宗

鏡之中雖引其文而不計*判遂令後学不知誰非吾

今翻破令識其非汝宗既云七八二識互相為根今

難第六以末那為根故有随念*計度者第八何故以 (6才)

末那為根而無随念*計度耶若爾翻酬*応云第六雖

以色根為依不遮亦有随念*計度若依瑜伽慈尊所

説既以肉心為第八根汝宗何故違背本祖不顧自

過拋理応言六七八識俱以肉心為所依根然第八

識無計度者同於前五色根為依而無計度以此而

言真妄和合法爾所作不応定執何況汝宗既云若

得自在諸根互用一根發識縁一切境 (已上) 又小乘不

計五識各超於自境外縁於他境而首楞嚴經云

体*外繞以手摩頭足一弁 (已上) 此是証於凡夫*之中

亦有一分互用之義謂以身識知眼見中形色故也 (6ウ)

設雖生盲盡知方円又大小二宗俱判定説眼識起

時空明根色四縁發識 (涅槃經中有此説也唯識宗) 中眼識九縁之中□*四縁亦)

(同此) 説) 問雖云以肉団而為意根何直不云肉心或云

意思耶答意所依故名為意思依主釈也眼等亦爾

眼耳即是見聞異名也故首*經云以心眼見等 (云云*) 持

* 応ナシ

* 計一評

* 随念一分別

* 随念一分別 * 酬一例

* 随念一分別

* 体一循体 * 夫一位

□^初 * 四縁亦) * □^初 | 初

* 首一諸 * 云一々

業尺*也義忠百法論疏云写*義相当名眼耳等(已上)汝
不知此義始於意根起疑難矣楞嚴經正說□*相
永*異諸說闇中見闇開眼閉眼俱見闇色*爾時不用
空及根明盲人見闇*亦復如有所見明闇雖有相*
能見性本無動搖見有見無雖有処異能見覺心周
(7才)

*尺—積 *写—字
*□—法
*永—求 *色—也
*闇—暗 *頤

通*法界其見即是妙明無上菩提又經云跋難陀*龍

*通—遍 *陀—陀

無耳而聞橋梵波提異舌知味舜若多神無身覺*觸

*覺—而

摩訶迦葉久滅意根円明了知不因*心念(已上)依此而

*因—以因

言耳等諸根亦不必依根發聞等也以是心知隨機

權說多不尽理但知隨器方円之空不悟本無大小

之空唯信違雲疾走之月不知運月即不運月嗚呼

遠哉首*經之中色根之義委悉如前又此經中於心

*首—遠哉首

法中立根義者見聞覺(覺一字扱*嗅嘗觸三三)合*中知故可詭於保由觸身 *扱—収 *合—同一合

覺故(知名之為根故經云如一見根見周法界聽嗅嘗

觸覺觸覺*知亦復如是(已上)即是七大之中根大文也(7ウ)

*觸覺—々々

又云生死流轉即汝六根菩提涅槃妙淨明体亦汝

六根不応於中更容他物(已上)心根之義略知如斯*問

楞嚴經云得陀羅尼入仏知見法華*經云開示悟入

仏之知見人師尺中云拳於六中初後二根故云知

見今疑仏之一字或翻曰知或*翻云覺六中知覺豈

非重耶答此有深理夫仏一字即是惣*体円融宝覺

*或—仏之一字或
*惣—惣

*心根之義略知如斯ナシ
*華—花

知見即是於別用中対法塵境名之為知対香味触

亦云覺也故法華*肝心真言中曰 薩*嚩(一如)

勃駄(知也覺也) 枳若囊*(知□*)

左紇毗*耶(見)*今謂漢*語單淺其名*雖同梵音既異義 (8才)

華|花 *薩|*サハ* *サハ* 薩

*若囊|惹囊 *□ナシ

*紇毗|紇瑟毘 **カ*から見まで割注

*漢|梵語既別二知豈同漢 *名|共名

不相濫次*明識者此經所立識義者還同有宗所判

識義謂於見外色已色境薰入胸中時*於肉心內發

識了知謂青謂黃名了別識是故經云汝今遍觀此

会聖衆用目循歷其目(色根)周視(心根) 但如鏡中無別分

析汝識(肉心)中識(於中次第標指此是文殊此富樓那等

文*云識(眼識)動見(見根) 澄非和非合疏云動謂能了別也

澄謂但照境也(已上) 問今言識動何謂心性不動耶又

云*胸中何謂遍法界耶答但是真覺隨根境時似有

前後及內外処由器形異似空*方円但除器方不除

虛空方相所在故經曰汝亦識其色相遷變汝識不 (8ウ)

*文|又

*云|言

*似空|空似有

滅界依何(界者)因也)立*(已上) 又入楞伽經云但不取諸境名

為識滅実不滅識(頰伽瓶喻) 此処応合) 問頼耶末耶意識何別

答此亦無別但是一隨*所縁境義立三識故經云則

汝識心及諸思量兼了別性為同為異同意即*意云

何所生異意不同心無所識若無所識云何意生*若

有所識云何識意(私*云三識同以肉) 心為根其*義弥顯) 問於六塵中前

*滅界依何(界者因也) 立|滅界(界者) 因也)

依何立

*隨|識隨

*即|則

*若無所識云何意生ナシ

*私|(已上) (私 *其ナシ

五暫似有本質矣第六法塵有何別体故經云生則色空諸法等生滅則色空諸法等滅所因既無因生有識作何形相（已上）若以內心貪嗔等法為法塵者貪嗔等是能緣心所何名所緣法塵耶*答實無法塵而（9才）

可对惑*明了意識雖緣五塵本質之境而實五俱意

後刹那隨於比量所得離本質境心知善惡無記三

性自心遍*計分別情有理無踴瓜*謂蝦其例是也問

色等五塵是本質耶答色等五塵於第八識是真独

影境前五識中雖*為本質既以前影為今*本質一人

佞妄諸人謂實非有實義故知諸法皆無本質但是

心變虛妄法也由此義故見性明人至臨終時不緣

万境一心永寂虛妄生死不復現行問若爾何故首

經第三云三科七大本如來藏所現妙用耶答指虛

妄所現名為妙用也起*信論說報*応二*身云但*随衆（9ウ）

生見聞得益故說為用於第一義諦無有用相可得*

（已上）淨用尚爾况*染用（已上）*妄有三義一者根本無明為

妄二者依*它*起法無有自性僅現虛相故名虛妄虛*

即妄*持業尺*也三者虛即依它*妄*即遍*計所執法也*

枝末無明力故*起遍*計執依眠力故所見夢事今*起

*耶—也

*惑—意

*遍—徧 *瓜—菹

*雖—以 *為今—今為

*起—故起 *報ナシ *二ナシ *但—又亦無有用相可得何以故謂諸仏如來唯是法身智相之身第一義諦無有世諦境難於施作但

*於第一義諦無有用相可得ナシ

*况—何况 *（已上）ナシ

*依—染淨依 *它—他 虚ナシ

*妄—是 *尺—尺 *它—他 *妄—起妄 *遍—徧

*所執法也ナシ *枝末無明力故—即是無明力故

実執問若爾何*經云深信大乘不謗因果乎因是善
惡果是無記故致此問也答以遍*計心*為因依他起
性為果如是信知名為深信亦云大乘故知妄*起遍*
計何統依他問若爾見性之人応*修疏*善否答宗鏡
意云實際理地自行門中不受一塵化儀門中隨機*
(10才)

於依他起上 *遍一徧 *今一令 *何一故
*以遍一徧 *心一執心
*妄一不起 *遍一徧
*応一不 *疏一衆
*機一時

順縁応作万行万行*書不尽意遂閣於筆而已*

*万行一云々

六知根 (亦名六) 情根 六色根 六塵 六識心王 (意識開三) 名為八識

*次行一「心根決疑章 (于時承久三年十二月一日赴大麓請沙門覺宴記之)」

見根 眼根 色塵 眼識 名曰色識

聞根 耳根 声声 耳識 名曰声識

嗅根 鼻根 香香 鼻識 名曰香識

嘗根 舌根 味塵 舌識 名曰味識

覺根 身根 触触 身識 名曰触識

知根 意根 法塵 意識 名曰法識

末那識意識細分也 (独影境) 又持業尺)

阿梨耶識 (持六色根及器世) 界為所縁境) (10ウ)

五十一心所 亦名心数

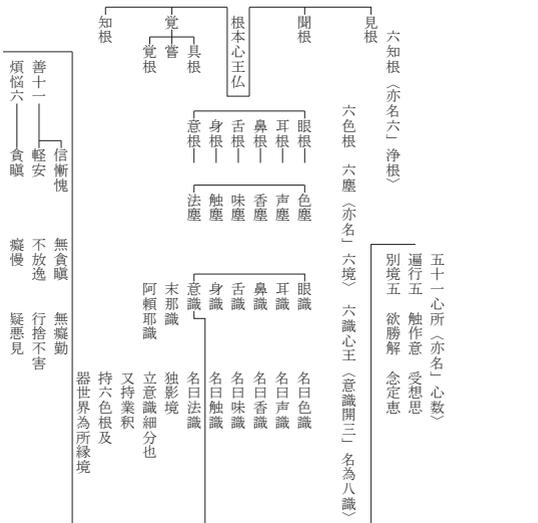
遍行五 触作意受想思

別境五 欲勝解念定慧

善十一 信慚愧無貪無嗔無癡

煩惱六 勒輕安不放逸行捨不害

貪瞋癡慢疑惡見



随煩惱□

忿根覆惱嫉慳誑詭惱害無慚無愧不信

懈怠掉举昏沈放逸失念敬乱不正知

不定四 尋伺惡作睡眠

(11才)

此中根心*王及見聞等六知之根并余八種心王識

体皆如湿性不壞未随*煩惱心数故也此*伝曰本無

煩惱元是無*菩提見聞覺知*性遍於内外煩惱纔現

胸肉*一寸方今*覺樹遍空垂*於涼陰煩根*小影難留

其相故経曰如一見根遍於法界聽嗅*嘗觸覺觸*覺

知亦*復如是凡*見聞覺知之時未及欣猷東西之念

况*随煩惱之數耶然小乘俱舍一宗但執眼根如鏡

外色伝影如鏡現像不知見是心之体性遍於法界

聞等亦爾故首経破曰若眼見者則諸已死尚有眼

存応皆見物若見物者云何名死云云*若唯識一宗

雖以見聞覺知名為心法亦不知見聞是常住真心

但知胸中肉心所住第*八識心随縁見聞速起速滅

故論云*依止根本識五識随縁現或俱或不俱如濤

波依若*(已上)故首経破云何故*昏迷以常為断今謹檢

唯識五俱意識者當於首経第六知根又今経六識

當於唯識明了意識及独*散意識*又今経六知根當

於唯識六種識也然唯識曰眼識九縁生云云*今経

随煩惱

忿根覆惱放逸誑詭

惱害慳嫉妬慳無慚無愧不信懈怠

昏沈掉举失念不正知心乱

不定四 尋伺惡作睡眠

*心—本心

*随—墮 *此—故此

*無ナシ *知ナシ

*肉—内 *今—人于 *垂—乘 *根—惱

*嗅—臭 *亦ナシ *凡—爪

*况—咒

*云云—(云云)

*第ナシ

*云—曰

*若—水 *何故ナシ

*独—触 *識ナシ

*云云—(云云)

破云盲*人見暗不用空明根*又明眼之人暗中見暗

不用空明根 (取意) 以是応知*其理不尽此宗既以周遍

法界円常之見還入胸中為第八以*本為末何有入* (12才)

期瑜伽第一以胸中肉心為八識所依処故最後死

時於肉心処識捨執受冷觸遍滿云云*応広見之非

依唯識胸中謂黃謂青名為眼識心*王*然猶未隨煩

惱心心*数余五亦例知可解云云*末那雖是執我之

識心王猶是本覺之性如來藏中本具意識之中本

具心*数慧*性之上受本不覺之薰習故能所合□*名

為業識初一念也然無始展転由業薰故*重起如來

藏心之中六根六境虚妄不実之境相故令於本無

煩惱之中心王本仏体用不二見聞覺知自然任運

能見聞覺知心数所起色声香味触法其*所現六根 (12ウ)

六境非染非浄無記也*但六知六識及諸心数名為

見分如鏡体用也六根六境名為相分如鏡中影然

相分有生生死故名為相縛*見分不生滅故名無相法

身故知出離生死者相分空華不滅而滅耳入楞伽

經曰*但不取諸境名為識滅実不滅識云云*私云例

之可云俱*取諸境名為識生実不生識云云*五十一*

種心数之中或染浄*或遍行*或不定染如水濁浄如

水浄然凡位中雖浄水*未純至果唯浄淨知教中煩

*盲—妄 *根—眼

*知ナシ

*以—未以 *入—八

*云云— (云云)

*心—以心 *王—五

*心ナシ *云云— (云云)

*心—意識本具心 *慧—恵

*故—薰故

*其—然其

*也—法也 *但ナシ

*縛—続

*曰—云 *云云— (云云)

*俱—但 *云云— (云云) *一一—二

*浄—或浄 *行ナシ

*水ナシ

□*—時

惱即菩提如氷即水*有*但約心数不約心王故於心
数染淨对治如相撲也今心所之名数且依百法論
(13才)

*即水ナシ *有―者

若六知六根六*識依*首楞円覺両經之説(云云)

*六―二 *依―偏依

心根決疑章*

(13ウ)

*章―章名目